

楽しい楽しい

「山小屋酒場」へのお誘い

(まだ一度も参加していない人のために)

15期 松林 知一



なお、次回春の小屋酒場は5月23日(土) - 24日(日)です。

ホンシャクナゲのきれいな時。

旧道から頂上までの整備がいよいよ完遂。

感激のテープカットができるかも？

先の話ではありますが、ちょっとでも参加希望がありましたら、返信該当欄に○を。

集合時刻の案内などは、希望者にもみ発送されます。

うっかり、飛入り参加は事務局へ直接お問い合わせ下さい。

山小屋酒場は残念ながら年に二度しか開きません。ですから、一度チャンスをのがすと半年は無念さをかみしめることになります。そうならないためには、万難を排して開店日のスケジュールを空けておく必要があります。仕事や家庭サービスがどんなに忙しくても山小屋酒場での貴重な時間には代えられないのですから。

では、山小屋酒場に顔を出すと、どんないいことがあるのでしょうか？

- ①ふだんは雲の上におられる“教祖さま”のご尊顔を拝することができる
- ②ふだんは奥の院におられる“政所さま”の手料理を味わうことができる
- ③ふだんは口も聞いてもらえない“ピチピチギャル”とも親しくなれる
- ④ふだんは動かすことのない筋肉のさび落としができる
- ⑤ふだんは味わえない、きれいな空気とおいしい水をたっぷりと吸収できる
- ⑥ふだんは眠っている脳の活性化ができる
- ⑦ふだんはできないウォーキングが楽しめる
- ⑧ふだんは考えもしない人生の深遠について思いを巡らすことができる
- ⑨ふだんは耳にすることもない鳥の声と川のせせらぎが子守歌になる
- ⑩そして、なにより酒がうまい

こんなにいいことばかりなのに、何と、会費はただなのです！ つまり、ただで酒が飲めるのです。このせちがらい世の中に、ただで酒が飲める場所がほかにあるでしょうか。

ですから、これまで一度も山小屋酒場へ来たことのない人は、せめて一度は顔を出しておくべきです。死んでも死に切れませんよ。

今度の開店日には、いよいよトイレが立ち上がります。めでたい建ち前ですから、当然お酒も大盤振る舞いされることでしょう。でも、せっかくのお酒が残ってはもったいないと思いませんか。召集令状が届いたら、何はさておいても駆けつけてください。

新しい顔にお目にかかれるのを楽しみにしています。

(了)

97年山小屋酒場報告 及び雑感

13期 辰野 隆義

今年は天候不順である。夏のまっ盛りに台風がいくつもやってきたり、秋晴れの時節に雨が続いたり…どうも嫌な日が続く。

9月上旬のある日、突如電話が入った。もちろん舟田さん。

「9月20日に小屋作業が決まりました。段取りをお願いします。」

とのこと。去年は10月中旬に実施した記憶のあった私は、そろそろ準備しなければ…とは思っていたものの、急な勧告を言い渡され、一瞬目が点になってしまった。あと2週間もないではないか。それに今回は便所を造るという大仕事の予定である。

電話は切ったものの、急に心が重くなってしまった。最近出張が多く、仕事その他で頭の中はほぼ満杯状態である。でも自分が言い出して始めたことである。何とかしなければ…。

(またしても編者注；辰野さんには、山中での施工の段取りというとてもない仕事をお引き受けいただいているうえに、必ずその報告記事を書かされるというワンゲルOB一の災難を被っていたいております。

それゆえ事務局の心痛も並々ならず、いつ段取りをお願いすべきか…早すぎる宣告もお気の毒、さりとて慌てなければならぬ事態も避けねば…。と苦慮したところで、現場監督なしで始められるものでなし、真先に辰野さんのご都合をお伺いしている次第です。ですから少なくとも、OB会報原稿をそろえていた8月上旬にはお知らせ済みでした…。

というわけで、ご記憶の件はそのお…ずれておりまして、その日は「遺憾ながらOB会報の印刷がまだ為されておらず、ハガキで急遽別案内を出すにしても、この段取りではOB参加者はほとんど望めないであろう」との連絡でした。

もちろん、勘違いされたにしても、それは重責をいくつもお抱えになっているせいと、重々承知しております。

億単位のプロジェクを担っている方に、こんなことをさせていいのか?!の自責の念にかられる私としましては、「小屋酒場の酒がどこよりうまい」「さあ、来春は…」のお言葉が何よりの救いなのでございます。ハイ。)

結局出張先の東京事務所で、仕事をしているふりをしながら便所のスケッチを書き、必要な部材、調達方法等を考える。その結果、これは道具・技術を持たない我々にはかなりの大仕事だということが判った。それに、大物の材料は現地調達となり、測量の技術もない我々は現地合わせて、臨機応変にやるしかないとの結論に達した。それと同時に、今回の作業では全てを完成させることは到底無理で、来春、またはその次までの継続作業になるだろうとの予測も立った。こうなればかえって気楽である。この会の基本理念通り、「無理せず、楽しく、迷惑かけず」の精神でやっていけばいいのだ。

1週間程してから舟田さんに電話を入れる。やはり参加希望の連絡がほとんどなく、5、6人のあたりかとの返事だった。それもよし。モットー通り、無理せずやれる所まででよいのだ。

大島君と連絡をとる。作業の相談と材料調達の為だ。今回彼は作業に参加できないが、材料調達を引き受けてくれた。

18日(木) 現場の帰りに一人でホームセンターへ買い出しに行く。

19日(金) 夜、大島君と待ち合わせ。借りてきてくれたチェーンソーを受け取る。

21日(土)

出発の日。先発隊は早朝から入っている。今頃高三郎を登っていることだろう。「小屋作業隊」といっても、私と15期松林君の2人のことだが、ダムで待ち合わせる。荷物はチェーンソ

ーに、栈木にする為の角材、その他。2人ではちょっとしんどいかな？と思いながらも力を合わせて、おしゃべりしながら山小屋まで4ピッチ。

山小屋の下の河原では15期奥名君がうろついていた。私達があまりにも遅いので、もう帰ろうかと思って下りてきたらしい。再度彼も小屋へ上がって休憩。春には出ていたはずの水が出ていない。早速奥名君と取水箇所へ行ってみると、ステンレス籠が砂で埋まってしまっていた。ドライバーでビスを外し、籠の中の砂をエンビはじくりだす。結構疲れる作業であったが、甲斐あって水場には豊富な水が出るようになった。即、ビールを冷やす。ここで奥名君はまたの再会を約して下山。

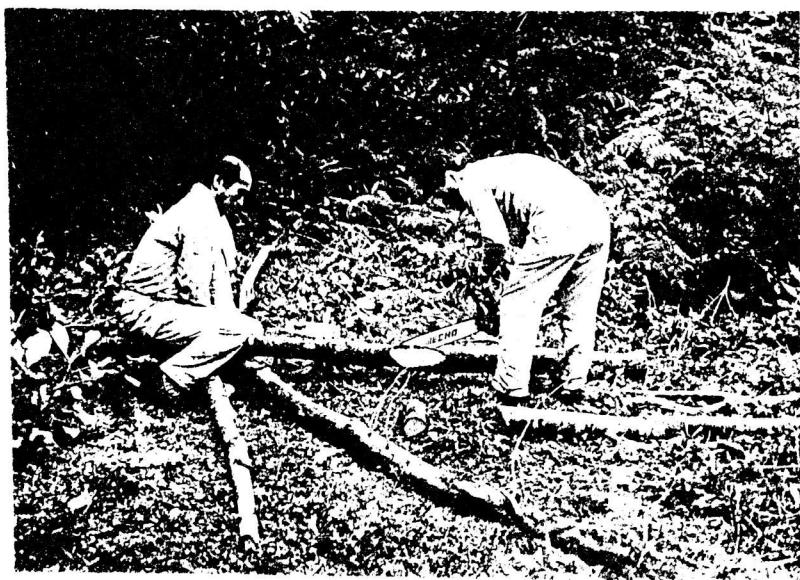
いれかわるように13期の吉田君が顔を現す。休憩し、ビール1本の後、明日にむけ、なるべく真っ直ぐに伸びた木を探しに出発。小屋の裏のブッシュへ踏み込む。久し振りのブッシュ漕ぎである。体にパチパチ当たる小枝が心地よいと思えたのは最初だけ。そして、斜面に生えている木というものは、どれも幹が曲がっていることも痛感する。それでもどうにか最初の気力を維持し、やっと5、6本の 木に目印の紐を結びつけ、ぐったりしてブッシュから逃げ出す。この分だと明日は木を切り出して終わりかもしれない。

高三郎に登っている連中はやけに遅い。仕方がないのでカマドに火でも起こして待つことにする。しかし街の人になってしまった悲しさ！火がなかなかおこせない。

そこへようやく高三郎から、現役と田村・舟田OBが帰還する。しばし再会を祝し、食当は現役に任せる。

夜の宴は他の人が書いてくれると思うので、省略するが、一つだけ言っておきたい。何故現役が奥の方でワイワイやり、OBの方は入口でひっそりやっていたいなければならないのか？大人気ないのでその場では言わなかったが、私の年代からすれば考えられないことである。（私は古いのでしょうか？）別にOB風を吹かせたいとは思わないし、昔の話をくどくど現役に話したいとも思わない。彼等には彼等のワングルの関わり方があり、青春を謳歌すればよい。が、OBを下座において歓談してられるような神経を私は持っていなかったし、あの頃の現役は皆そんな気遣いができていた…そんなギャップをぐっと飲み込んで、にこにこ笑顔を作っていました。

一夜明けて21日。昨日は久々に一日中青空できれいな星空も拝め、今日ももってくれそう。朝食後、現役達は下山。残ったのは総勢5名のOB。とてもアッホームなのんびりした気分で





ある。

私が求めていたのは、まさにこれであった。毎日忙しく飛び回り、いつも頭の中は仕事の段取りやイライラで埋め尽くされ、溜まりに溜まったストレス。その忙しい中をやりくりして、山小屋酒場の段取りをし、疲れた体にムチ打ってベルクハイムにたどりつく。苦勞した割には参加者も少なく、他人から見れば報われない、馬鹿げた思い入れとも映るであろう。しかし、街でいくら金をかけて楽しもうと、この一時に勝るものはない。一日布団に潜り込んでいてもとれない、そんな類の疲れがすっと抜けて、心の底からリラックスできる。これぞ本当のリフレッシュ。参加できないOB達は残念ですね…が私の本音である。

さて本日の作業は木の切り出し。男3人はブッシュに潜り、チェーンソーで目的の木を切り倒し、枝を払い、予定の長さに切断したうえで、ブッシュの中を小屋まで引きずりおろす作業を行う。なかなかの重労働である。昨日のような小枝のパチパチが気持ちがいいどころではなく、しゃにむに小屋めがけまっしぐらである。それだけに切り出し後の快感は言葉にならないものがあつた。そのまま地べたに座ってしばらく休憩。さっとコーヒープレイクが運ばれ、煙草も何ともいえないうまさ。そういえば昔は小屋での麻雀中に煙草が切れ、わざわざ駒帰まで煙草の買い出しに往復した奴もいたな…。

あとは木造りである。どうやって柱や梁を持たせるかを現場を見ながら相談し、寸法を合わせて切断していく。「この木をこう切って、こ

こに打ちつけよう」で、パタパタパタ、ギューンと切っていく。チェーンソーを扱うのは吉田君（通称ホヅミ）。実にうまいものだ。ところが、ギューン…ギューン…パタ…？止まってしまった。スタートの紐を力一杯引くが、パタパタパタ…だけで動かない。コックをひねって覗いてみると、燃料切れだった。実に順調に行っていたのに…急に体が重くなってしまった。誰言うともなしに「今回の作業はここまで」となり、切り出した木を小屋の脇に積み、以下来春とする。

舟田女史が仕込んでいた昼食も頃合よく並べられていた。昨晚と今朝の腹に収めるだけの食事に比べれば、さすがのもので、ふっかり炊けたご飯に、ウナギの蓮蒸し、カニ真蒸のおつゆ他、が並び、これまで山では食べたこともない豪華メニューであった。存分に働いた後の心尽くしの手料理…実に満足な秋の小屋作業のフィナーレであった。

今回の山小屋酒場は参加OBも少なく、こじんまりしたものでした。でもそれはそれでよいと私は思います。「無理せず、楽しく、迷惑かけず」をモットーに、参加できる人が、心のリフレッシュを求めてベルクハイムに集うことが目的だからです。強制されて参加すべきものではないし、都合がつかなければそれも仕方ないし、昔に少しでも帰って「我、とこしえに緑なり」が実感できれば、それで良いのだと思うからです。

さあ来春の酒場の日までまた頑張ろう。

全体として受けるイメージは20年前と変わってはいない。

もちろん、枝や葉が生い茂って道とは思えなくなったダムから先の道、見晴らしのよかった筈の湖に突き出た休憩所、言われなければそれとは気付けないガレ場、跡形もなくなった倉谷の廃屋——一つ一つをとってみれば、みんな変わってしまった。そして私自身も変わってしまったけれど、こうして小屋に一人ぼつねんと座っていると、何もかもが以前と同じような気もした。

見上げると山々に画された狭い空。昨日までの雨で、辿り着くまでにずぶ濡れになってしまったが、その雨の御蔭で空気も澄んで、空の青さも一段と増している。時折真っ白な雲が行き過ぎる。絵本のような空にはかえって不自然ささえ感じてしまう。

頭から足の先まで水に浸かったように濡れてしまった。着替えた物を、わずかに夏の名残を含んだ日差しで暖まった、小屋の礎ともいえるまわりの石に、張り付けて乾かした。生まれて間もないトカゲが何匹もその石の上を這い回っている。丁度心地よい暖かさなのだろう。

少し離れて「愁心の碑」。かつて、上の方が太く、猫背気味になった高さ1m程の柱に嵌められていたこの碑は、今はコンクリート製になり、落書きさえある。双六小屋のトイレに落書きしてひどく叱られたことを思い出す。

この碑の前には、何の為なのか、ドラム缶の上部10cmを切り取ったものが置いてある。時々乾かし物を見に行くと、決まってそこに1m程の黒っぽい蛇が昼寝をしていて、その都度茂みの方に仕方なく移動する。とても逃げて行くといった様子ではなく、ドラム缶の下でもを寝ぐらにしているのだろう。

しばらく小屋の中で横になって休んでいても、物音や鳴き声は聞こえない。時折聞こえてくるのは、迷い込んできた蜂の羽音と、窓ガラスに

ぶつかる音くらい。少し寂しくてラジオをつけてはみたがすぐに消す。こんなにもゆっくり時間が流れることもあることを、改めて思う。だからといって、退屈というのでもない。

普段の生活では、あまりに物が身近な所にあるすぎるのだろう。冷蔵庫をあければ食べ物や飲物、リモコンのボタンを押せばテレビやステレオ、ちょっと手を伸ばせば雑誌や本。何やかにやと時は流れ去っていく。

疲れのため、しばらく眠る。

そういえば水場の整備を頼まれていたのだった。靴はまだ乾いていない。サンダルで行く訳にもいかず、土間を見渡すと、地下足袋が1足。丁度26cm。田村さんよろしくこいつを履いて、鎌を片手に取水口への道を辿る。替えのズボンが薄手の生地で、刺のある枝があたると痛くてたまらない。最初のバルブ地点はすぐ近くの、そこまででえらい目にあってしまった。案の定バルブを開いてもチョロッと水は出ない。

そこから先はブッシュが生い茂って、中には背丈程もあるイバラのなれのはてまであり、しばらくは枝払いに専念する。第2バルブは開けると勢よく水が飛び出してきたので、ここまでは水が来ているのかと思ったが、みるみるその勢いが衰えて止まってしまった。たまっていた水が出てきただけだった。沢筋に出た所に第3のバルブがあり、そこはあけても1滴の水も出なかった。やはり取水口でつまっているようだ。

沢を少し上がった所に取水口があり、周りを石で固定してある。とはいえここまで来たのは初めてで、水の取水構造がどうなっているのかはもちろん知らない。金網の上には落葉が溜まっており、とりあえずそれを取り除いたが、それだけで水が出るようになるとは思えない。金網のすぐ下は砂地になっている（この下に本体があると、後でわかった）。その金網はビスでしっかり留まっていて、鎌しか持っていないので開けることもできない。ホースの先は石の下

をくぐってどうなっているのかそれもわからない。

あとから辰野さんも来ることだから、それからにしようと小屋へ戻った。ところが午後に来るという辰野さんと松林は、待てど暮らせどやってこない。明日は所用があり、4時前にはここを出発したい。「早めにおりて来よう」などと言っていた田村さんも舟田さんも帰ってこない。水場が直っていないのが心残りだったが、3時も過ぎてしまったので、周りを片づけて小屋を下りた。

丁度下の道に出た所で、のんびり二人がやって来るではないか！しかたなく(?)小屋に戻りとりあえず水を確保するために、辰野さんと取水口へ向かった。そこで初めて構造を知る所となった。金網を外して中の砂を掻き出す。あまりの多さに、途中で支えている足がつりそうになる。底の方は粘土質の砂になっていて、結構力のいる仕事となった。ホースの先の部分をきれいに砂から出して、そこへ手をやると吸い込まれてちぎれそうなくらい水が流れていく。これで舟田さんには蔑まれずにすむことになったが、辰野さんにはいつまでたっても頭が上らない。

という次第で他力ながら責任を果たし、ホースから流れ出る水で冷やしたビールを1本飲んで小屋酒場を後にした。下の道に出た所で、今度は穂積さんに出会ってしまった。でももう戻る訳にはいかない。これ以上遅くなったら明るいうちにダムまで帰れなくなってしまう。さすがに暗くなったら一人では帰れない。

倉谷自体の雰囲気はほとんど変わっていないように、穂積さんも全体からしみ出てくる雰囲気は昔のままで、一目で誰だかわかってしまう。

ここに来ると、みんな昔に戻ってしまうのかもしれない。



連絡が出遅れたこともあり、また技術系は第3土曜は休みではない。結局参加者は上記の6名になった。ニューフェイスは同期の奥名さんくらいで、翌早朝会社の慰安旅行に出る為日帰りという彼には、早立組に加わってもらった。

田村教祖様は、常宿の天神橋詰め休憩舎でお泊まりだった(既にそこで信者を増やしておいでる模様)。教祖様は来沢ついでにまず御息女をお訪ねになるも、彼女の夜勤とぶつかり、前夜も新潟駅で野宿されたとのことだった。

現役達は昨日入山し、今日は倉谷を6時発で作業し、明日は帰るだけの予定。昨日は午前中が雨。予定どおりに出立しているか?と少々気にしていた所、昼1時に

「ダムより奥で1箇所崖崩れがありますが、現役は予定どおり倉谷に入りました」

との電話を3年の小川さんからもらった。連絡を感謝したもの、どういう背景でそんな情報が入ってきたのか?よくわからない。幸い今日は好天に恵まれそう。露払いの奥名さんはすぐぐしょ濡れになった。

出島の手前にザックが3個転がっていた。崖の下にでもと見回すも誰もおらず、何のことかわからない。(あとで判明。昨日ここで女子が一人落ちて脚をねじり、総計3人が引き返し、2人が翌日の今日入山することになっていた。引き返したうちの小川嬢がついでに崖崩れの連絡をいれてきていたのだ。)出島からは例年どおり草薙がしてあり楽になる。

小屋上がる。ありゃ水が出ていない。散々気にしていた蜂の巣は小屋の内部には痕跡もなかった。よかったよかった。

(初夏の小屋酒場の帰りに、何であんな所にナットが?と思ったのがスズメバチの巣の台座だった。上馬さんに電話で聞くと、スズメバチは初夏から巣を作り始め、一夏で大きくしてしま

う。まだ営巢しているなら厄介…とのことだった。あれから現役も小屋には入っていないそうで、小屋に泊まれないかもとの連絡もしていたのだった。



この報告を帰ってから、また彼に入れたら、彼もホッとしながら、巢作りは中断されることも多く、もともと有機物の為、他の生物に食べられたり、菌類に分解されて消失することもあると教えてくれた。また少し賢くなれた。）

ざっと現役のザックを数える…11個。高岩チーフの話では17名参加だったが…。電話で「17人！」と思わず絶句した私に、彼は申し訳なさそうな声で「皆、都合が悪いとか、用事があるとか言って…」とつけ加えた。チーフが苦労するだけで、個々の部員は30万円が入るといっても義務も責任も感じてくれないのだろうか。

（昔は、秋休みはPWと小屋作業がセットになっていた、前半、後半のどちらかは小屋作業に出ることになっていました。その種の苦労は余りなかったのではないかと思います。

それに何より皆が山小屋が好きで、留年した、失恋したの麻雀だのと、いつも誰かが小屋に行っていました。部室から、白鳥路に下りて交差点を渡れば、駒帰へのバス停があり、部室から小屋までは一筋に道がつながっているような感覚もありました。思い出は星の数ほど…そう一年コンパを山小屋でやろうとなって、早々に留年を決めた細田君が肉を抱えて先発。その後集中豪雨になって本隊の入山が一日遅れ、もしや犀川ダムの藻屑にでも…と心配した私達を、彼は30人分の牛肉を一人占めした艶やかな顔で出迎えてくれたのでした。肉なしのすきやきを私達は嬉し涙にくれて食べ…。食べ物の恨みは怖いから、まだ覚えてるわ！）

であれば、わざわざ参加した部員の方は誉めて

あげなければならない。

奥名さんには水場整備を任せ、田村教祖様と高三郎へ向かう。彼は「現役を並べて拝調するんだ」と笑い、私は遙々会津からこんな所まで駆けつけてくれるような方が、創部者であることに感激していた。一度ならず、毎回…。真似のできることはない。私達の元気の素の田村教祖様がずっとお元気で君臨されることを、祈らずにはいられない。こどもやりましたね、あそこも…で登って行くのは楽しく、春に張ったロープもぐいと握ると思わず笑みがこぼれるのだった。

BHの立出時間差が2時間半。であれば、現役は分岐あたりに取り付いているだろうか？ところが登り口から2時間の所で私達は現役に追いついてしまった。昨秋の終了地点どころか、前高のなだらかになりかかる所だった。

彼等は昼食が終わった所と言い、半数が慌てて立ち上がって行った。ともかく「ご苦労様」と声をかけ、3つの転がっていたザックの謎も解け、彼等の方にも現役の本日参加部隊が未到着であることがわかった。

息を整えつつも私の顔は引きつっていたに違いない。昨秋は台風がかすめ、風雨についての作業だった。こんな晴天に恵まれた日に、昨年よりちょっと進んだだけで、30万円いただきなんてどうしてできる？小屋酒場の日を決める時、辰野さんは迷惑かけずの趣旨どおり現役の作業日にこだわらなくても…だったのだが、私は40周年が控えていることや、複数の人間がいる方が臨機応変の対応が可能になることや、何より30万円を請け負った人間として現場を確認しなければの責任で、今年も同一日の線でまとめてしまったのだ。やっぱり…現実は一。

落胆を押さえ彼等の作業を見ていると、ラッセルと同じことをやっているのだった。先頭が作業にかかると後ろは皆つつ立って待っている。せいぜい手の届く範囲の小枝をひょいと払うだけで、ぼんやり待っているのだった。こんな手順ならここまでしか進まないはずだ。

埒が明かない。私達は「お先に」と彼等を追い越し、昨秋の終了地点から始めることにした。おぼしきあたりに到着し、足を止めると同時に私の口の方は、ボロのチョンの文句で止まらなくなり、田村さんの方は静かに頷かれて「OBでやるしかないなあ」とのたまわれた。さすが教祖様。教祖様には、ワンゲルの門を叩いた小羊は全てが可愛いのだ。非難すべきは彼等個人ではなく、もっと背後に横たわるものなのだ。収まらない腹の方は昼食で塞ぎ、鋸を手にして伐開を始める。「今年はこちらをやりました」と胸を張って報告できるのは、ここから後…アドレナリンもエネルギーも充填された勢いで猛然と刈り進む。

足場が悪くなったと思うと、分岐下のガレ場に来ていた。時節柄、高茎草原にうっそうと覆われ、幼木が育ち始めていた。このガレ場をどうするか懸案だったのだが、この分ならそこそこ土が落ちていくことだろう。ガレ場の最上部の5mばかりは右に迂回路ができていた。はっきり迂回路とわかるよう刈り明けておく。そこからすぐが分岐だった。赤布が2本下がり、新道側はさすがに藪が濃いようだった。ザックを置いて写真を撮り、伐開をすませてからザックまで戻り、同じアングルにして写真を撮る。この比較写真が、スポーツ振興課への報告写真となる。



ここからは高三郎でなければ撤退したいような藪。ぎっしり小枝を伸ばしたのや、茂った笹が道の痕跡になだれかかっている。伐開スピードがガクンと落ちる。

ようやく現役達が追いついてきた。彼等も伐開の要領が判ってきたらしい。間隔をあけて各自が体を動かすようになってきた。さっきは迷惑気なよそよそしい顔だったのが、同じ汗を流す仲間の顔付きになった。先輩のやり方を見よう見真似で覚えていくことが、途絶えてしまっているのだから、勝手にカッカとなっているのもおかしいのだ。今回は仕事の都合がつかなかった椿川さんや、岡部さん。やっぱりあなた達のような壮年OBが、戦力としてもお手本としても必要だわ。私の前で休憩した6人は皆1年生で、新トレの高三郎が辛かったこと、それでも登れた後は嬉しかったし、高三郎が登れたらどんな山だって登れると聞いて自信がついた…と昔と同じように話していた。だから私もとっつきは腹の立つこともあるのだけれど、やはり現役は可愛い、やっぱりやれることはやってあげよう、それが先に生まれたものの務めなのだと思います。

3時近くになり、彼等は帰り支度を始めた。私は「田村さんが先行しており、彼と合流でき次第引き返すから」と前川君に言って、頂上を目指す。そこからは、5-60cm中の踏跡が判別で



きるものの、藪を掻き分けて進む状態だった。大岩の段差にはロープが張っており（帰路の時ここにも右に迂回路があるのか判った）、20分で頂上だった。田村さんとはその手前で出会い、彼も再度頂上に戻られた。頂上は三角点の周囲直径3mばかりか刈り開けてあるだけで、すす竹の壁。展望も何もない。「金沢大学ワンダーフォーゲル部」の案内板を支え持ち、田村さんと交代で記念写真。そう、ここは金大ワンゲルの名が一番誇らしい場所。思い入れのある山を持てる人は幸せだ。たとえ「くたばれ高三郎」であろうと、「藪山高三郎」であろうと、「道が荒れている」と聞いて胸疼くような山はここしかない。いよいよ来年には開通できるのだ。

補助金のことを教えて下さったナカオの林さん、スポーツ振興課長に引き合わせて下さった5期の稲葉先輩、そのうえ尾崎主査が倉谷出身で話がツーカーだったうえに、OBや現役の皆も現場に出てくれた。だから「高三郎に道ができる」というのは、それ以前に「人と人との関わりそのものが道を作る」というイメージがあって、そのことにすぐく私は酔えてしまった。同時に小屋酒場の企画もスタートして、こっちは13期の皆さんのリードで着々と整備が進み、快い疲労のあとにおいしいお酒で酔えることにもなった…。三角点を撫でつつ、そう、高三郎の神は本当にいるんだわと私は微笑んでいた。

ガスにおおわれだした。明るいうちに下山しなければ…。慣性の法則も味方して800m付近で現役に追いつき、頂上から1時間半で沢に下り着いた。田村さんの地下足袋は、下りは踏んぱりか効かず不利になるよう。奥名さんはとくに帰宅しただろうし、のんびり先輩を待つ。

この下りてくる途中で「いいがになったなあ。新道もほとんど通れるがになった。あと1回やれば大丈夫や。」と言いながら、私を追い抜いて行った人がいる。前号の梅さんの文章中に出てくる、新道口に小屋がけをしているM氏だった。彼は私達が登り



だした時に、田村さんと挨拶を交わして、「いい天気やな。わしも今日やるわ。」と言っていた。新道を伐開していたのは彼だったのだ。合流した田村先輩が夕食にお誘いすると後でお邪魔するとの返事だった。どういう方なのか、あとのお楽しみ。

BHには辰野さん達が到着しておられ、水が滔々と流れ出ていた。参加人数が決定した時点で、夕食と翌朝食は現役の食客になるとしてあった。せめて竈でご飯を炊くかと試みるも、昨日までの雨で湿気をおびた生木は燃えつかず、結局カセットコンロで炊きあげた。その頃にはM氏が到着。さすが山暮らしのプロでてこずった竈にパッと火をつけてしまい、湯わかしに利用することにした。

M氏は松任は千代野の人で、まだいくつか小屋をかけているらしい。昨年新道を伐開していて帰りに旧道側を回ってみたら、伐開の後があり、それならなおさら新道を仕上げにゃと思っ

ていて今日になったという。10月にもう一度やってそれで大丈夫やと言っていた。大倉山も横谷側から伐開したそう。すごい！と思いつつでもどこか得体がしれない。こちらも当たらずさわらずの所で止めているし、M氏も無難な話で応答している。彼があまりに私のことを「見かけたことがある」というので「ナカオの…」と言うと、「ああそれでわかった。本で見とるんや」と言う。本と言われても、それとわかるほど正面を向いているようなのはなかった筈だし…。それに彼が「ナカオのYを知っとる」と言うそのY氏がこれまた例会に2度しか顔を出していないような得体の知れない人で、ますます困惑させられてしまった。彼が大型ライトを灯して帰った後もしばし？？が漂っていた。この倉谷より奥で一人、山暮らしができる人なんて！！！！に？？？

夕食はカレー班と鳥鍋班があった。今日の入山組がやや増えたものの、昨年より一段とこじんまりになった。小屋に収まるには手頃な人数である。自己紹介をしあい、この時黒の上下の人が山崎主将だとわかった。顔を覚えた頃には卒業してしまうが、そうやって否応なしに世代交代してしまうのは、長所でもある。変わらない部分と、変わっていく部分がほどよくかみあって、ワンゲルは今年も42期の新人達を迎えることができた。卒部証書も、確たる資格ももら

える訳ではないのに。目前にいる彼等との間にまず相違点を見つけてしまうことの方が多いけれど、価値感はきっと同質といえるものだと思う。それを共有できたと実感できるのは、同じ世代の仲間に限られてしまうが…。

満点の星で冷え込みもきつい。就寝中何度かカマドウマが跳ね飛んできた。初夏の酒場の後田村さんが遊びにきたカマドウマの足を皆切り取られたそう(!)だから、新参加者？仲間の恨みを晴らしにきた連中なのか？昔、びっしり便所の屋根に貼りついていましたよね。

21日(日)臆面もなく「正調ご飯の歌」を披露してあげた。今日現役達は帰るだけである。

「ではかたづけましょう。」「団装は?」「適当につこんで」の結果、大鍋とコールマン1器が忘れてあった。テン泊なら忘れないだろうけれど。

小屋は静かになった。この小屋の維持を現役にも伝えていけたらと思うが、もう土台が違うのだ。おそらく春の小屋酒場が小屋を開き、秋の小屋酒場が小屋仕舞いを兼ねることになるだろう。その間に現役達が1泊でも2泊でも利用してくれ、テントとは違う良さを体験できたら…その時、小屋を大事に思う世代が育ってくるかもしれない。

辰野さん、吉田さん、松林さんが、トイレ築



造用の立木を切り出しに行った。このためのチェーンソーを大島さんがレンタルしてくれ（OB会計には無料）、辰野さんがボッカされて、昨春鳥越さんが慌てて夜中に買い出しに行って搬入してくれた混合ガソリンを使用する筈が、田村さんが、それはゴミ焼却用に使ってしまったとのことでズルッになった。それでもかろうじて今回の切り出し分は持ちそうとのことだった。すす竹林の奥にチェーンソーがうなり、小枝を落とした生木が引きずりおろされてくる。田村さんはBH登り口の標識立てと、隣人M氏への挨拶（急遽、穂積さんと白山へ向かわれることになったため）に向かわれた。私の方は、小屋仕舞いのつもりで掃除と備品チェックにかかった。そろそろ備品チェックカードのようなものを作って、補給システムを確立していいかも。そして春先にはボートで一括荷揚げとゴミ下ろしを行えば…まだ改善の余地がある。ダム湖の切れ込みは面倒でもあるけれど、ボートでアプローチなんて、他の山では絶対やれないことができてしまうのだ。

「あと15分もってくれたらなあ」でガソリンは尽きた。丁度田村さんも戻ってこられ、昨日見つけて諦めてしまったアケビを、帽子一杯に

収穫していらした。おまけにそれを私の前に捧げて土下座されるものだから、もう笑ってしまい、皆でありがたく頬張った。

酒場の方は参加人数によりまして、私、5人と判った時点で、大衆酒場ではなく、割烹路線でメニューを練っておりました。ですから三つ葉やカボスといった薬味まで用意しまして、鰻の蓮根蒸しや、カニ真蒸のおつゆなどを並べたんです。そう、会津より遠来の大先輩には加賀料理を召し上がっていただかなくては…ハイ。（エッわか家？今日はお多福からチャーシュー麺をとっている筈でございます。）

来春までと、床にシートを敷きつめる。パボナも吊り下げる。小屋の空き缶、空き瓶類を詰めると、来る時なみにザックは重くなった。よく働いた2日間だった。

「今度は？」と言えば

「今度は〇〇を」と

応える仲間のいるあたたかさ

…サカバ記念日より…



9 7 小屋作業を終えて

40期 CL 高岩 伸行

今年の小屋作業も、去年の作業を引き継ぎ、高三郎山までの登山道の草薙を行いました。

当日（9月19日 金曜日）は朝から雨降りでもコンディションはよくありませんでしたが、とりあえずベルクハイムまではと考え、出発しました。

ダムの駐車場に車を停め、早速歩き始めましたが、5分とたたないうちに崖崩れで道が塞がれている場所にぶつかりました。かなり危険を感じましたが、通るのにあまり苦労しない程度だったので、素早く通過しました。

ダム沿いの道はいつも歩いていて多少の危険を感じていましたが、今回残念ながらその不安が現実となってしまい、1回生一人が滑落してしまいました。水のある所まで落ちなかったのと、岩にぶつからなかったのが幸いしたのか、見たところ大事に至ってはいなかったのですが、正直ほっとしました。しかし膝を痛めてしまったので、3年生2人を同伴して下山してもらいました。

この1件でだいぶ時間を食ってしまったのと、あいかわらず雨脚が強かったので、今日の作業を中止してベルクハイムで待機することにしました。出発前からベルクハイムは使用できないかもしれないと聞いていましたが、蜂の巣（内

部のものではなく、戸口の真上の屋根からぶら下がっているもの）は刺激しなければ危険ではなさそうだったので、中を掃除して泊まることになりました。虫がうるさかったけれども、それさえ除けば水はしみてこないし、床は平らでとても寝心地が良かったです。

2日目（20日 土曜日）は雨もあがり、山登りには最適の晴れ模様になりました。去年藪がひどく刈り取った区間は、今年は少し雑草が生えている程度で、作業の成果を感じることができました。

今回もまた改めて分かりましたが、草薙鎌は刃が弱く、山道の整備にはかなり難がありました。何本も潰してしまったのはとてももったいなく思いました。やはり鉋や鋸が最も適しているのではと思いました。

残念ながら頂上まで終わらすことができませんでしたが、やれるだけのことは出来たので、良かったです。夜は一緒に作業を手伝って下さったOBの方々と食事しお酒を飲み、親睦を深めることもできました。

自分個人としては、高三郎は毎年何度も訪れた所であり、今回が最後になるかもしれないだけに感慨深いものがありました。

